

平和・環境・健康はひとつ

～八雲立つ出雲から陽が昇る～

人間自然科学研究所メールマガジン

vol.11

みなさま

今こそ、哲学を！ 「人類・人・人間」

「人類」

人類は他の哺乳類と違い、未熟児（爬虫類脳）で生まれ、哺乳類脳・生理的欲求が確立。人為的二足歩行により、安全・集団・尊厳・自己実現欲求が生まれ、限りなく悪魔にも近づけば、限りなく神にも近づく生命体。未来の死から思考する「自己超越実現欲求」が確立すると「死して朽ちず」健康寿命を賜る。

「人」

三人寄れば文殊の知恵・他者との関係性の中で、存在意義を感じ、自己が確立する。
親（母・父）と子の3人の関係、他人の関係性の中から、察してやらせて頂く回路が脳（能）の中にできる。
今の日本は、江戸・明治・戦前の国際情勢、戦争の時代を経て敗戦・戦後の国際情勢を背景に、意図的に作られた虚構の戦後政治に、本質的な原因がある。

「人間」

竹島、尖閣諸島問題に象徴される、歴史問題の行き詰まりと、新型コロナウイルスの世界的蔓延にも歯止めがかからない不安な状態が続いています。

人間自然科学研究所は、「北朝鮮・韓国・日本」と核大国の「中国・露国・米国」の人類史における抑制された対立に注目、時間と空間の間を活かし、日本国の発祥地ともいわれる、朝鮮半島の対岸に位置する連結汽水湖 宍道湖・中海圏域から、「和譲」の言霊を響かせ「原理（天略）・原則（政略）・現実（戦略）・現場（戦術）・現物（戦闘）」の関係性を追求、「対立から共生の文化」へ変わる先駆けを担う「天命」を果たすときを迎えました。

幼にして学べば壮にして成す
壮にして学べば老して衰えず
老にして学べば死して朽ちず
佐藤 一斎（1772～1859）

平和は一人ひとりの心の中から生まれるもの

先日、所用で徳島県を訪れる機会があり、「第九の故郷」を訪問、いろいろかんがえさせられました。

日本全国で年末に毎年、演奏、歌われているベートーベンの「第九」は、徳島県の鳴門市でアジアで初めて演奏されました。

事の起こりは、大正３年、第一次世界大戦に参戦した日本は、大恩あるドイツの租借地であった清国青島を攻撃、約４７００人のドイツ兵を俘虜としました。そのうち約１０００人を鳴門市大麻町（当時の板野郡板東町）の板東俘虜収容所に送りました。この収容所を管理していた松江豊寿所長をはじめとした人々は、俘虜たちの人権を尊重して、できるかぎり自主的な運営を認めたため、自由で快適な収容所生活を楽しむことができ、所内では音楽やスポーツ、演劇などさまざまな活動がおこなわれ、地域との交流も盛んとなりました。地域の人々は、俘虜たちの進んだ技術や文化を取り入れようと牧畜、西洋野菜栽培、音楽、スポーツの指導を受けました。市民は「ドイツさん」と呼び、彼らとの日常的な交歓風景があたりまえになっていきました。ベートーヴェンの「第九」交響曲はそのような状況の中で大正７年６月１日、ドイツ兵によって演奏されました。それがこの曲の日本での初演となったのです。

この日を鳴門市では「第九の日」と定め、この地に記念館を作りました。

しかし、日本人は、ドイツ兵が捕虜になった背景・きっかけ・プロセスと当時の国際情勢・経緯を良く学び、ドイツその他の国々の立場にたって、本質的・多面的に考えないといけないと深く感じました。

日本はドイツから近代国家を形成する基本となる法律・医療を取り入れ近代化を進めたことを忘れてはいけません。

同じ鳴門市には、大塚美術館の素晴らしさにも感嘆しました。

ミケランジェロの「最後の審判」に描かれている少ない天国名簿と、大きな分厚い地獄名簿。「鬼滅の刃」との関係性も連想され、現代日本の在り方を考えるきっかけにもなりました。



[鳴門市ドイツ館-日本とドイツ友好の象徴-](#)



関連動画 2004年11月20日放送 (9分37秒)

朝日ニュースター よみがえれニッポン対談番組

ニッポン再生・逆転の発想「世界平和の情報拠点」



浜菜みやこ おはようサンデー

2020年12月20日・12月27日放送(ダイジェスト)



テーマ：誕生エピソード

ポーランドのリスナーからお便り

峠三吉「原爆詩集」朗読・紹介

「火の鳥」「はだしのゲン」「カムイ伝」の紹介

著森村誠一「悪魔の飽食」から731部隊の紹介

太陽の國水の都緑の街と小田裕一郎さんの紹介

小松昭夫社長の紹介から「和議」について

ズットナー像を全国世界の5箇所に同時建立する構想朝鮮半島と日本列島の使命を読んだ

リスナーからの感想



テーマ：今年、嬉しかったこと

対立から共生の文化へ

長い歴史問題から生まれた国家間対立、近年では深刻な米中対立、核・スマートフォンの爆発的普及、世界を覆うコロナ禍、とめどもない通貨政策などが重なり、朝鮮半島と日本列島から究極の危機が始まりかねません。

朝鮮半島の対岸、中海・宍道湖圏域で活動続けてきた人間自然科学研究所は、「天の時・地の利・人の和」を得て、「対立から共生の文化へ」転換する「平和・環境・健康」「宗教・政治・経済」「感激・感動・覚醒」を深く考察、議論、活動を通じて「天命」へと繋がりました。

朝鮮半島対岸に位置する中海・宍道湖圏域は、核大国の中国・ロシア・アメリカの対立と日本・韓国・北朝鮮の対立に国内の地域間・世代間・貧富の差の拡大・国家の統治不全も重なり、社会不安が急速に拡大しています。

このような状況下に、島根原発三号炉の完成を控えています。

政略(原則) の上位概念の天略(原理) から、**真の地方創生**のストーリーを描くことにより、これに関わる方々の才能が次々と開花し、**真の健康寿命**を賜る流れが始まると信じています。

平和の定義＝戦争の無い状態は言うまでもなく、才能の開花を妨げる社会の文化的・構造的要因も無い状態

平和は創るものです。平和は、あたりまえのようにこの世に存在するものではありません。人間という生き物の特性を知り、その危うさを自覚するところから学ばなければなりません。

環境の定義＝社会環境（世界人的環境・国内人的環境）と、地球の歴史と、人類の長い営みから生まれる自然環境。

私達は地球をひとつの生命系として連鎖して存在しています。自然破壊、経済優先、効率主義の蔓延による危機が迫り、このままでは人類の悲劇は避けて通れないと思われれます。「豊かさの指標を変える」新しい哲学が必要です。そしてその哲学から生まれる新しい事業こそ私達が担うべき事業です。

「永遠の命を賜る」

健康の定義＝肉体及び精神（心と脳）が時間（神）の経過と共に、次々と才能が開花する状態。人類は自然界で関係性が無いと生きていけない生命体。価値観が同じで得意領域が違う3人が語り合う状況が必要とする。三人寄れば文殊の知恵。

人は何のために生きるのか。私は「楽しく愉快に天寿を全うしたい」と考えています。そのためには自分の才能が開花して光り輝く状態であり続ける生き方を実践し続けるチカラが大切だと考えます。健康寿命を長くする秘訣はまさに自分の中に眠っている才能を呼び起こし鮮やかに開花させることにあると考えています。

編集後記

コロナ禍の中で2020年が終わろうとしています。

コロナ以前から私たちが直面していた文明の大転換への突入、価値観を転換する必要性に気づきながら、生きていたはずでしたが、コロナはこれを加速させました。

21世紀文明の主役は何か？ 答えを模索している時にコロナが世界を襲ったのでした。

「生命の危機」を私たちは認識し、慌てふためいて一年が終わります。

生命とは、人類・人・人間とは、深遠なテーマへの取り組みが始まりました。

小松昭夫社長は、今こそ、「哲学（宗教）・政治・経済」の関係性を、人類の特性を入りに考察、人間自然科学研究所の26年の活動を背景に、未来を拓く時だと仰っています。

宍道湖・中海圏域の、特別な自然環境から生まれた精神文化の広がりや奥深さが、私たちの心を揺さぶります。

2021年は、新年号でご紹介する「和譲」で「宿命」を「運命・使命」に、そして「天命」に昇華、歴史の転換点の地政学的役割の一端を担うことで、「**平和・環境・健康はひとつ**」に繋がると確信しています。

今年一年、メルマガをお読みいただき誠にありがとうございました。

来年もよろしくお願いいたします。

編集人 長谷川泰二



小松電機産業株式会社



人間自然科学研究所

Copyright © 2020 Komatsu Electric Industry Co., Ltd., All rights reserved.